

行政と市民による「協働農園」



—農的デザイン研究所代表・蔦谷栄—

全国で市民による里山や水辺環境の保守・管理の取り組みが展開される中で、原風景を守る活動の一環として行政と市民が「協働」して里山農業ともいえるべき農業に取り組む東村山市の事例を紹介する。

東村山市は東京都の西北部にあり、西武新宿線に乗れば新宿から最速だと20分ちょっと。都心のベッドタウンであるが、武蔵野台地のほぼ中央、狭山丘陵の東縁に位置しており、自然は豊かで、映画『となりのトトロ』の舞台となったといわれる八国山緑地があるとともに、多摩湖の一部も市域に含まれる。市街化による農地の宅地化が進行しているが、郊外には豊かな自然が残されている。

東村山駅から西に車で10分ほど走った多摩湖近くの住宅がまばらになったあたりに「谷戸（やと）」になったところがある。雑木が生い茂り、そこから水が湧いて水路となって流れ下り、水田が作られてきた。市当局はこの地域に着目して1996年度から市民と一緒に調査・協議・計画立案を行う「せせらぎの道整備事業」を開始した。

市民は「里山や水辺環境の保守管理・動植物の保護育成を行い東村山の原風景を守る」ために「東村山の原風景を守る会」（以下「守る会」）を立ち上げ、2010年3月には東村山市との間で保全管理に関する協定書を締結している。これに基づき、緑地での落葉・雑草・ごみ・不適樹種の除去および「支障枝」の処理、湧水・水辺での希少動植物の生息地としての適切な自然環境の保持、学校と連携しての環境学習の場としての畑の活用などの保全管理のための活動が展開されている。原則として毎月第1日曜日の午前9時から12時、第3水曜日と第3土曜日の午後1時半から4時半は、会員が集まって活動する日と決めている。

都市化による開発から自然を守る保全管理活動を展開する中で、谷戸にありながらも耕作放棄され、廃土置き場となっていた水田の土を入れ替えて畑地とし、ここで共同しての農作業にも取り組んできた。1反ほどの畑であるが、訪れた4月の第3水曜日には高齢者を中心に10人ほどが農作業に取り組んでおり、スナックエンドウ等を収穫するとともに、ジャガイモの芽かきと土寄せ等が行われていた。こうした農作業と並行して緑地の保全・育成のための管理作業も行われていたが、今では農作業が守る会の活動の柱の一つになっているだけでなく、時期・季節によっては活動の中心にもなっているようだ。農作業をしている人たちは一般市民であり多くは初心者ではあるが、中には市内で開かれている農業講座を受講した人や、他所での農業ボランティアを経験した人もおり、初心者はこうした人のまねをしたり教えてもらったりしながら農作業を行っている。



自然環境の保全が取り組みの基本となっていることから、栽培は当然のように農薬は使用しない有機農業だ。また守る会が行政から受託する形で自然環境の保全活動が行われ、その一環として農地の復元が行われて協働農園が設けられている。市民と行政がパートナーシップを組んだ試みであり、環境・景観の中に農業を位置づけ、かつ市民の幅広い参加と交流を可能にしているこの協働農園に注目したい。

[〈表紙・目次へもどる〉](#)